

The Cashless Island

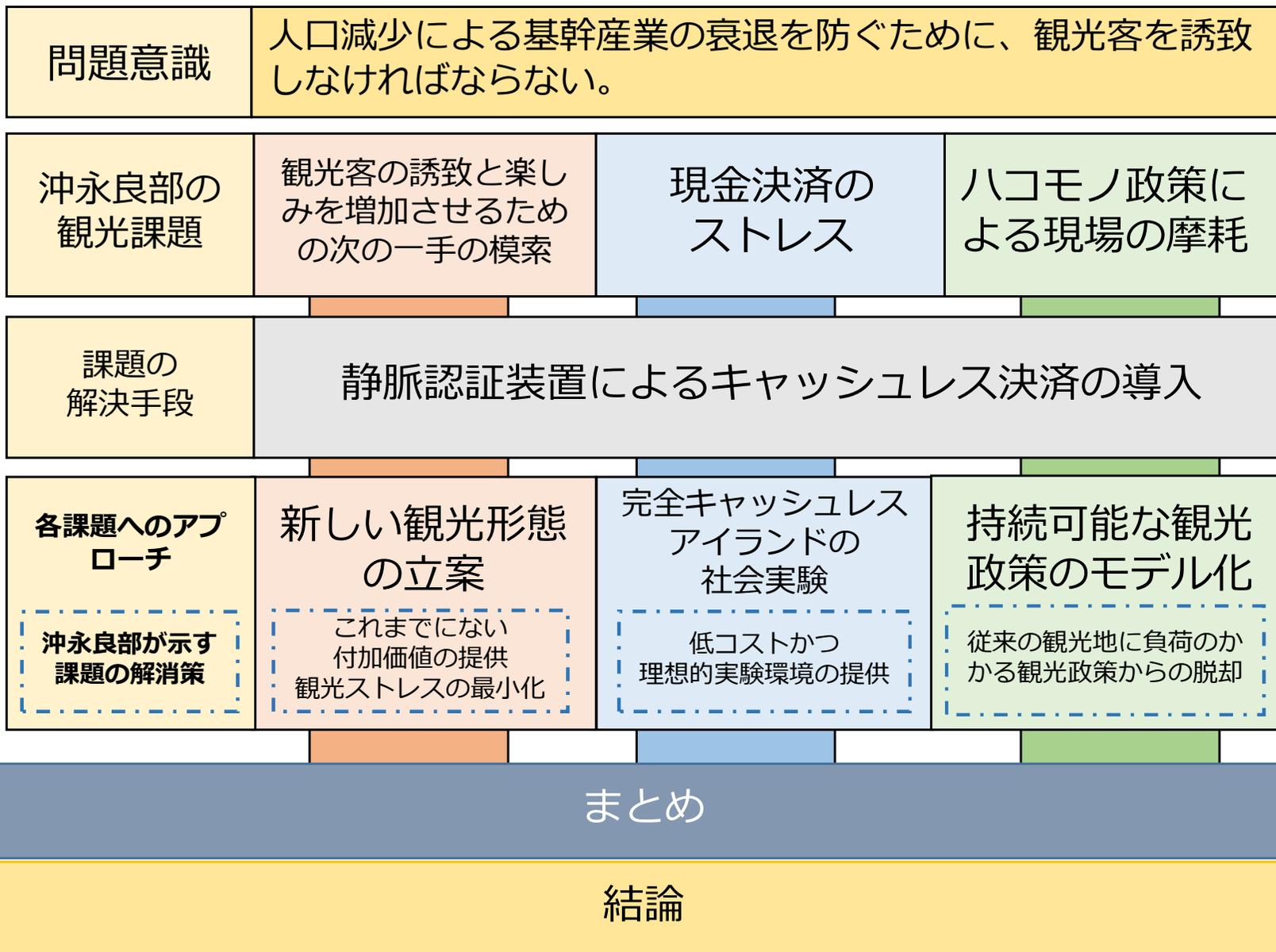
鹿児島大学 法文学部
経済情報学科 澤田ゼミ
松田優太郎 緒方啓人 黒田怜佐

本稿の構成

目的

地元体験型観光の提案を通して沖永良部の観光課題を解消すると共に日本・鹿児島県の観光課題脱却に貢献する

本稿の流れ

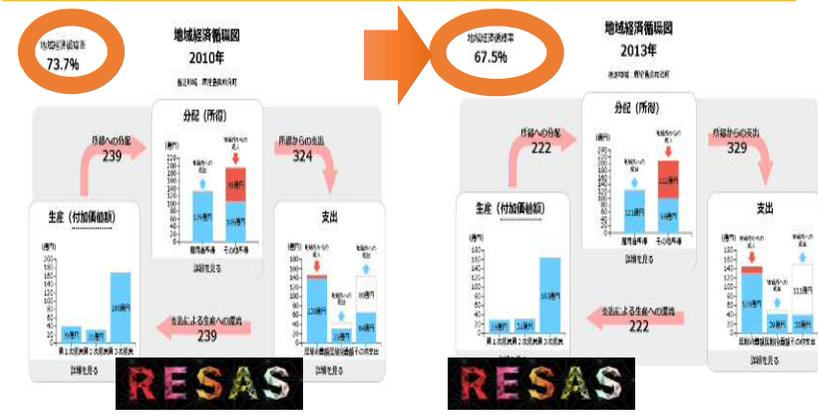


問題意識：沖永良部の現状

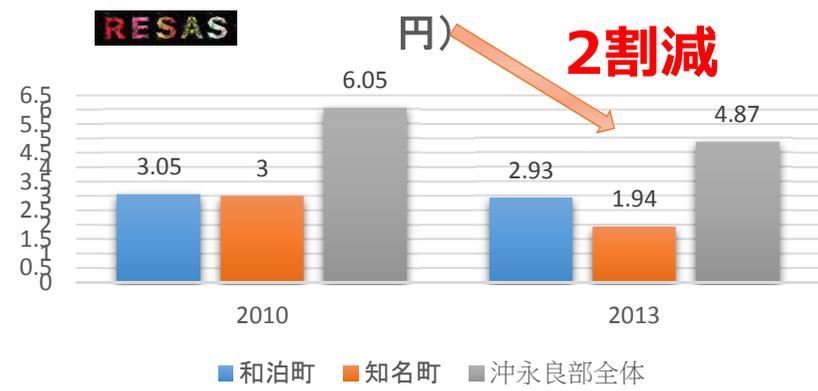


Google mapを基に作成

地域経済循環率の悪化



1次産業 1人あたり付加価値額 (百万円)



おきのえらぶ島は「農業の島」でもあります。(中略) 2040年には、島の人口は12.966人から10.406人にまで減少すると推計されています。(中略) **定住人口一人当たりが一年間に消費する金額は124万円。仮に推計通り2040年に島内人口が2,590人減少したとすると、島内で消費・流通するはずだったお金が約32億円も失われることとなります。**当然ながら、商業やサービス業の衰退を招き、さらには福祉や医療、公共サービスといった社会のインフラにすら深刻な打撃を与えます。(平成28年度おきのえらぶ島観光DMO化事業報告書29ページより抜粋。赤字は筆者が着色。)

経済活性化するためには観光業に力を入れることが重要。

沖永良部の観光課題

“沖永良部は日本にとってのすでに起こった未来”

沖永良部島

日本

① 次の1手の模索

経済維持のために観光客を現在の約9倍にする必要がある。

観光客1日消費額＝島民2週間分消費額

1年間＝365日＝52週なので52週/2＝26

つまり観光客26人で島民1人分の年間消費額をまかなえる。

2040年時点で失われる島民は2590人なので

26*2590＝67,340人

観光客6万人増加が必要である

(H27年度客数7097人)

② 現金決済のストレス

沖永良部島 飲食店数
食ベログ:44軒
支払カード可:1軒

本土と同じ支払フローができない



③ ハコモノ政策による現場の摩耗

- ◆ H24年10月18日に奄美大島エコツーリズム推進協議会設置
- ◆ 新造船フェリー波之上就航
- ◆ 西郷隆盛 沖永良部遠島150周年記念

単発的な観光投資に留まり、マネジメント化されていない。

宿泊サービスにおける事業所数と従業者数(人)



観光立国の実現が叫ばれて久しいが現状として**大型複合リゾート**から**エコツーリズム**以降の次の一手が未だ打てずにいる。

- ・低いキャッシュレス決済率
- ・外国人向けの支払い手段の未整備
- ・完全キャッシュレス化への抵抗

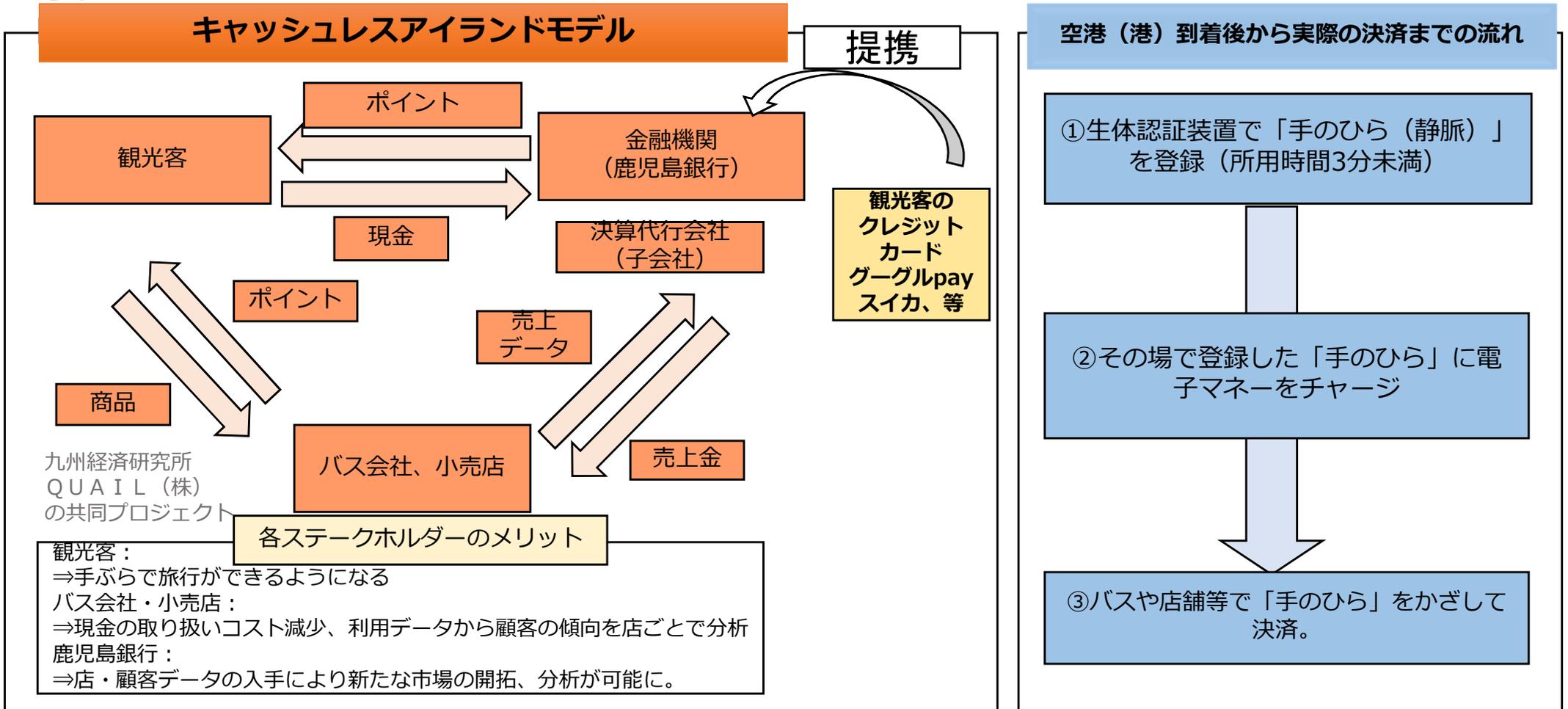
政策立案後、国から予算を得てプロジェクトを観光地に足し算することで発生する構造的な問題

課

題

課題の解決手段： 島の取り組み（キャッシュレスアイランド化の推進）

- ☑ バスイベントで静脈認証による手のひら決済の実験が行われた
- ☑ バス全線、タクシー、自販機、小売店舗、飲食店決済への導入の準備が進められている。



- ・ 最終的にはクレジットカードと紐付けし、完全キャッシュレスの島を目指す
- ・ 地域一帯で完全キャッシュレス化の事例は未だ国内に存在せず

課題①「次の一手」へのアプローチ： 「地元体験型観光」の立案

- ✓ 観光ストレスの極小化
- ✓ これまでにない楽しみの提供

手ぶら観光で今までなかった「地元民にしかできない楽しみ方」を体験してもらう

沖永良部での地元体験型観光の一日の流れ（耐水ケースに日本円を入れて持ち歩く必要がない）



島に到着後、空港（港）でアカウント作成。ホテルに荷物も財布も全て預け、着替えだけを持って即出発。



劇団主催のLARPに参加。
バスで島を巡る。
途中ソテツジャングルで記念撮影



散策中見つけた海が見える定食屋でランチ



タクシーでワンジョビーチに向かう。手ぶらのまま海を満喫。疲れたら浜へ上がり、そのまま海の家で軽食をとる



ホテルまでの道中で見つけた居酒屋で島料理を楽しむ。

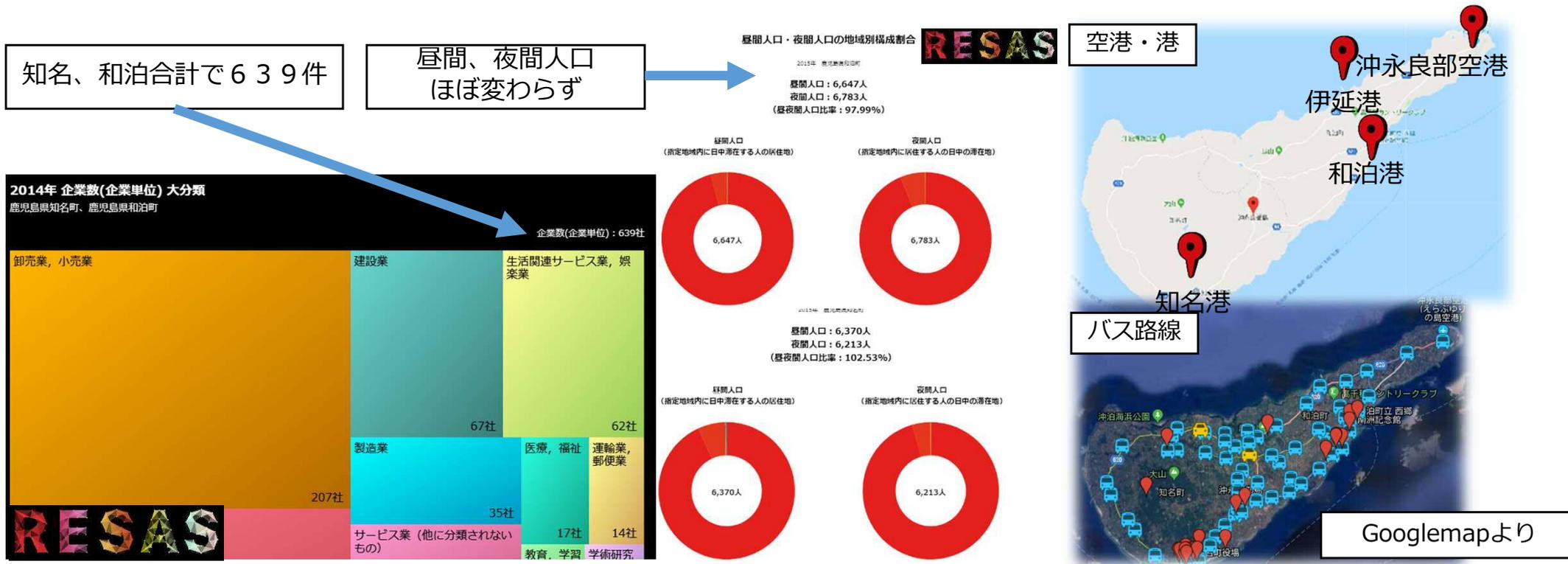
観光協会HPから抜粋

観光地全域をキャッシュレス化してストレスから解放されるシステムを作る
⇒地形や風土を活かしたエコツーリズム+複合リゾートを意識した移動・決済ストレスの最小化により、屋外にいるにも関わらず、まるで複合リゾートにいるかのような快適さを味わってもらう。

課題②「決済ストレスからの解放」へのアプローチ： 完全キャッシュレスアイランドの社会実験

☑ 理想的な実験環境

☑ 低コストで実現可能（静脈読み取り機は1基当たり2万5千円）

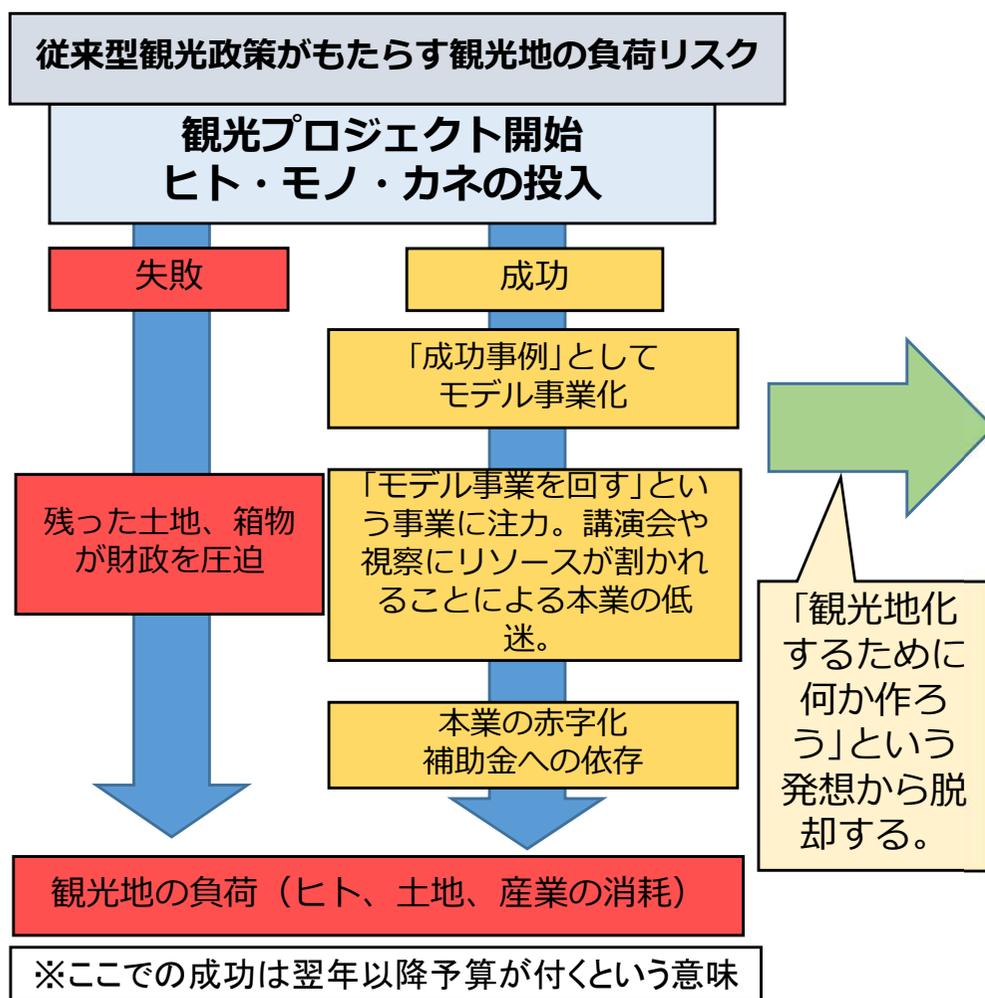


沖永良部の出入り口である港、空港の計4カ所さえ認証装置を網羅すれば、全観光客に対応できる。
（1カ所当たり約7万円の投資）
バス路線も島内で完結しているため、精度の高いデータを低コストで得ることが出来る。
くわえて事業所も比較的数量が少ないうえ従業員もほぼ島内の人間ということから、この島は完全キャッシュレス化の実験に好条件だと言える。

課題③「現場の摩耗を防ぐ」へのアプローチ： 持続可能な観光政策のモデル化

☑ 従来の観光地に負荷のかかる観光政策からの脱却

施策の初期投資は最小限に留める。既存の設備・施設で認証装置から得た顧客情報を活かすシステムを構築する。



(例) 劇団がじゅまる様のLARP

- ・島の団員と共にストーリーを進めながらバスで島を巡る
- ・島の地理、歴史にちなんだ脚本構成で、島にゆかりがない人でも島を楽しむための必要な予備知識を自然と身につけることができる

LARP・・・Live Action Role Playingの略。観光客＝プレイヤーは島を巡って謎解きやイベントをこなし、ゲームのクリアを目指す

まとめ：本提案を通じて実現したい願い

沖永良部島の取り組みがこれらの第一歩となる将来

地元体験型観光

観光立国として訪日外国人に日本/鹿児島で満足な観光をしてほしい

マリンレジャーの楽園的存在になって欲しい

完全キャッシュレス化

従来の観光政策からの脱却

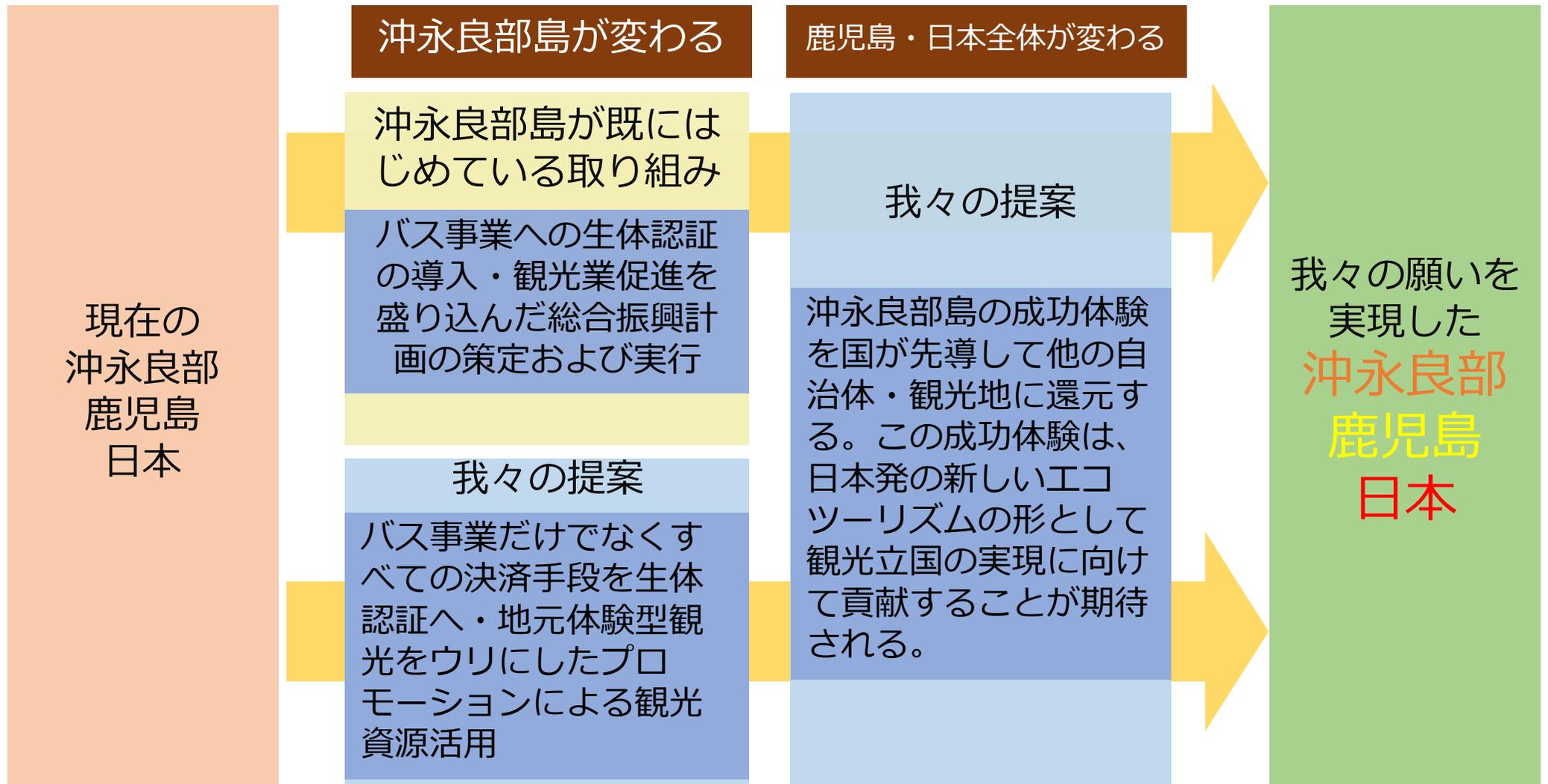
地方の離れにある離島で豊かな暮らしができるようになってほしい

静脈認証決済比率を上昇させて日本人全員に完全キャッシュレス（財布すら持ち歩かない世界）の便利さを知ってほしい

自然の豊かな観光地に過剰な設備投資をすることもない自足可能な観光政策のパイオニアになって欲しい

生体認証・AIの世界で世界のトッププランナーとして活躍する日本

結論



本政策はHow-toでもなければ魔法の杖でもない。この提案はあくまで地元体験型観光が「できるようになる」だけで、これで今までの考えや行動を直接変えられるわけではなく、ましてや劇的に観光客が増えるようなものではない。沖縄県が発展するためには、県内外の沖縄県に関わる方々やこれからのお客様から頂ける「産業構造を変えるほどの熱量」が必要である。日本の未来の姿の投影として沖縄県島の問題を捉え、沖縄県、そして日本・鹿児島が活路を見出すきっかけとすることが私たちの伝えたい本当のメッセージである。

ご静聴ありがとうございました

